

下町の植物目録(1923, 1970, 1981)

環境委員 清田 秀雄(74回)

「下町の自然や風景はどのようなもので、どんな生物が暮らしていたのか」

約40年前、江東区での復元型ビオトープ整備に先立ち、『目標とする自然環境』を明確に設定することが必要でした。そのため、地域に残る過去の文献を探索ことから始めました。文献を探しながら痛感したのは、地域の植物相に関する過去の文献が極めて少ないことで、まとまった調査自体ほとんど行われていない実情がありました。

今回の展示は、下表の3つの文献について、植物分類の新たな体系であるAPG分類体系*に基づき目録を作成したものです。これらはビオトープの保全現場で現在も活用しています。

当時の下町の自然を思い浮かべながら、目録をご覧ください。

表 目録を作成する文献一覧

著者	発表年	タイトル	ページ	書籍名	発行者
草野俊助	1923	自然的環境—植物	p.103-p.165	* 南葛飾郡誌	東京府南葛飾郡編
本田正次、矢野佐、小松崎一雄	1970	葛西地区的植物	p.1-p.24 + PL.1	北東低地帯文化財総合調査報告	東京都教育委員会
渡辺瞭	1981	江東区南部の植物	解説4ページ + 目録19ページ		渡辺氏手書き資料

*東京都立図書館がデジタル化した、江戸・東京関係資料の画像を検索・閲覧できるデータベースである「TOKYOアーカイブ」で閲覧可能。



*被子植物のAPG分類体系

教科書や植物図鑑でこれまで慣れ親しんできた新エングラーハイエリック体系やクロンキスト体系は、花の有無や構造の違いなどの形態情報から系統関係を推定して作り上げた分類体系でした。これに対し、APG分類体系は、ゲノム解析により進化系統順に分類した分類体系であり、根本的に異なる分類手法で、植物図鑑の多くもこの分類体系で改定が進んでいます。

■目録作成の目的

1)分類体系の統一

作成年代、分類体系、記述形式の異なる3つの文献をAPG分類で統一し、新たな植物目録を作成することで、普段のビオトープ保全活動へ活用する。

2)都市緑地への活用

今後に計画されるビオトープなどの自然環境保全や緑地整備への活用を図る。

3)データの共有化

過去文献が活用されないまま散逸しないように、地域の自然環境の変遷を確実に記録し、NPOなどの市民団体や教育施設、研究機関などとのデータ共有の材料とする。

■目録の作成方法

webページ『植物和名—学名インデックス YList』(略称:YList)を利用。

<http://www.ylist.info/index.html>

■3つの文献の概要

1)『南葛飾郡誌』

草野 俊助(1923):自然的環境—植物

1923年(大正12年)、当時の南葛飾郡役所郡長であった大島亨蔵が南葛飾郡誌の冒頭で語っているように、群制廃止の記念として出版するものであり、それまでの地方誌とは一線を画し、各分野ごとに専門家が分担執筆する内容となっています。全体の構成を依頼された小田内通敏による編纂方法は、現代にも通じる地方誌の作成方法として大変優れた内容となっています。

現在の葛飾区、江戸川区の全域と墨田区、足立区、江東区の一部からなる南葛飾郡の自然や生物を記録した資料は非常に少ないが、最も早い時期の信頼できる資料となっています。植物に関する記述は、植物病理学の専門家である東大教授草野俊助が執筆を担当しており、当時としてはまとまった資料となっています。100年前の資料であるため、原文は縦書き、文語調の文章とともに旧漢字・旧仮名遣いです。

2)『北東低地帯文化財総合調査報告 第1分冊』

本田正次・矢野佐・小松崎一雄(1970):葛西地区の植物

東京都教育委員会が1970年にまとめた『北東低地帯文化財総合調査報告 第1分冊』の中の1章として、本田正次、矢野佐、小松崎一雄が著したもので植物目録を中心に24ページあります。高度経済成長のただなかにあり、自然環境の破壊や公害問題がクローズアップされた時期でもあり、北東低地帯(墨田区、江東区、足立区、葛飾区、江戸川区)の植物相をまとめた資料は大変意義深いものです。また、文末に挙げられた多くの参考文献も地域の自然環境を研究するうえで欠かせない資料となっています。

3)渡邊 瞭(1981):江東区南部の植物

江東区では、1970年代、80年代に埋め立てが急速に進み、南部埋立地には遷移初期段階の広大な植生が出現しました。ここに足繋く通い、観察記録を残されたのが渡邊瞭氏です。多くの外来種とともに山野や湿地の珍しい植物も見られましたが、遷移の進行や臨海部開発とともに確認できなくなった種類も数多くあります。『江東区南部の植物』は1981年にまとめられた手書き資料であり、1971年(昭和46年)から1981年(昭和56年)までの採集データがまとめられた貴重な資料です。また、江東区の発行する『江東区の野草』、『続江東区の野草』、『続続江東区の野草』のきっかけとなりました。関連する標本類は、国立科学博物館に寄贈され、「江東区の種子植物標本(帰化植物)」として収蔵されています。

■今後に向けて

1. 植物相の動態の長期にわたる把握
2. 情報共有ツールとしての活用
3. 標本類の必要性
4. 地域の埋もれた文献の掘り起こし

地域に残る植物目録は、土地利用の変遷や気候変動を記録した資料として極めて重要であり、今後の自然環境を再生していくうえの基礎データを与えてくれます。そのため、これからも地域に埋もれた文献を探して、統一した分類体系で保存し、広く活用できるようにしたいと考えています。今回の3つの目録は、国会図書館や都立図書館、江東区図書館でいつでも閲覧できるほか、博物館、行政、市民団体、大学、高校などへ配布しました。

もし、地域に埋もれている文献などをご存じの方は、以下のアドレスまでご連絡いただけますと幸いです。

NPO法人ネイチャーリーダー江東

<https://nlkoto.org/お問い合わせ/> (担当:清田まで)